表 106：属性別家からの徒歩圏内に、次の場所はどのくらいあるか：
生鮮食料品が手に入る商店・施設・移動販売

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
たくさんある	748	2	1
ある程度ある	2148	5	7
あまりない	661	0	2
まったくない	298	0	1
わからない	52	0	0
合計	3907	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
たくさんある	19.2	28.6	9.1
ある程度ある	55.0	71.4	63.6
あまりない	16.9	0.0	18.2
まったくない	7.6	0.0	9.1
わからない	1.3	0.0	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

表 107：属性別家からの徒歩圏内に、次の場所はどのくらいあるか：
夜の一人歩きが危ない場所

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
たくさんある	363	0	1
ある程度ある	1766	4	3
あまりない	1255	2	3
まったくない	87	0	0
わからない	388	1	4
合計	3859	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
たくさんある	9.4	0.0	9.1
ある程度ある	45.8	57.1	27.3
あまりない	32.5	28.6	27.3
まったくない	2.3	0.0	0.0
わからない	10.1	14.3	36.4
合計	100.0	100.0	100.0

表 108：属性別家からの徒歩圏内に、次の場所はどのくらいあるか：
気軽に立ち寄ることができる家や施設

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
たくさんある	53	0	0
ある程度ある	1341	5	4
あまりない	1745	1	4
まったくない	398	0	0
わからない	317	1	3
合計	3854	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
たくさんある	1.4	0.0	0.0
ある程度ある	34.8	71.4	36.4
あまりない	45.3	14.3	36.4
まったくない	10.3	0.0	0.0
わからない	8.2	14.3	27.3
合計	100.0	100.0	100.0

表 109：属性別ふだんどのような方法で、生鮮食料品を入手しているか：
自分で出かけて買い物

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	856	1	5
はい	3136	6	6
合計	3992	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	21.4	14.3	45.5
はい	78.6	85.7	54.6
合計	100.0	100.0	100.0

表 110：属性別ふだんどのような方法で、生鮮食料品を入手しているか：
家族等の送迎で買い物

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	3078	6	9
はい	914	1	2
合計	3992	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	77.1	85.7	81.8
はい	22.9	14.3	18.2
合計	100.0	100.0	100.0

表 111：ふだんどのような方法で、生鮮食料品を入手しているか：
送迎サービスを利用し買い物

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	3975	7	11
はい	17	0	0
合計	3992	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	99.6	100.0	100.0
はい	0.4	0.0	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

表 112：属性別ふだんどのような方法で、生鮮食料品を入手しているか：
家族等に頼む

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	3119	7	3
はい	873	0	8
合計	3992	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	78.1	100.0	27.3
はい	21.9	0.0	72.7
合計	100.0	100.0	100.0

表 113：属性別ふだんどのような方法で、生鮮食料品を入手しているか：
買い物代行サービス（家政婦等含む）を利用

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	3979	7	11
はい	13	0	0
合計	3992	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	99.7	100.0	100.0
はい	0.3	0.0	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

表 115：属性別ふだんどのような方法で、生鮮食料品を入手しているか：宅配サービスを利用

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	3782	5	11
はい	210	2	0
合計	3992	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	94.7	71.4	100.0
はい	5.3	28.6	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

表 116：属性別今の生活に満足しているか。

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	3184	6	9
いいえ	679	0	2
合計	3863	6	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	82.4	100.0	81.8
いいえ	17.6	0.0	18.2
合計	100.0	100.0	100.0

表 117：属性別生きていても仕方がないという気持ちになる

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	585	0	4
いいえ	3260	7	6
合計	3845	7	10
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	15.2	0.0	40.0
いいえ	84.8	100.0	60.0
合計	100.0	100.0	100.0

表 118：属性別毎日の活動力や世間に対する関心がなくなってきたように思う

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	901	0	7
いいえ	2945	7	4
合計	3846	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	23.4	0.0	63.6
いいえ	76.6	100.0	36.4
合計	100.0	100.0	100.0

表 119：属性別生きているのがむなしいように感じる

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	492	0	4
いいえ	3327	7	7
合計	3819	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	12.9	0.0	36.4
いいえ	87.1	100.0	63.6
合計	100.0	100.0	100.0

表 120：属性別退屈に思うことがよくある

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	1034	0	5
いいえ	2862	6	6
合計	3896	6	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	26.5	0.0	45.5
いいえ	73.5	100.0	54.6
合計	100.0	100.0	100.0

表 121：属性別普段は気分がよい

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	3387	7	8
いいえ	495	0	3
合計	3882	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	87.3	100.0	72.7
いいえ	12.8	0.0	27.3
合計	100.0	100.0	100.0

表 122：属性別なにか悪いことがおこりそうな気がする

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	574	0	2
いいえ	3277	6	8
合計	3851	6	10
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	14.9	0.0	20.0
いいえ	85.1	100.0	80.0
合計	100.0	100.0	100.0

表 123：属性別自分は幸せなほうだと思う

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	3530	7	10
いいえ	385	0	1
合計	3915	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	90.2	100.0	90.9
いいえ	9.8	0.0	9.1
合計	100.0	100.0	100.0

表 124：属性別どうしようもないと思うことがよくある

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	1080	0	5
いいえ	2783	6	6
合計	3863	6	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	28.0	0.0	45.5
いいえ	72.0	100.0	54.6
合計	100.0	100.0	100.0

表 125：属性別外に出かけるよりも家にいることのほうが好き

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	1590	0	5
いいえ	2276	7	6
合計	3866	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	41.1	0.0	45.5
いいえ	58.9	100.0	54.6
合計	100.0	100.0	100.0

表 126：属性別ほかの人より物忘れが多いと思う

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	757	2	7
いいえ	3122	4	4
合計	3879	6	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	19.5	33.3	63.6
いいえ	80.5	66.7	36.4
合計	100.0	100.0	100.0

表 127：属性別こうして生きていることはすばらしいと思う

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	3080	2	7
いいえ	733	2	4
合計	3813	4	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	80.8	50.0	63.6
いいえ	19.2	50.0	36.4
合計	100.0	100.0	100.0

表 128：属性別自分は活力が満ちていると感じる

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	1966	4	2
いいえ	1873	3	9
合計	3839	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	51.2	57.1	18.2
いいえ	48.8	42.9	81.8
合計	100.0	100.0	100.0

表 129：属性別こんな暮らしでは希望がないと思う

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	748	1	4
いいえ	3096	5	7
合計	3844	6	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	19.5	16.7	36.4
いいえ	80.5	83.3	63.6
合計	100.0	100.0	100.0

表 130：属性別ほかの人は、自分より裕福だと思う

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	1359	0	6
いいえ	2396	5	5
合計	3755	5	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	36.2	0.0	54.6
いいえ	63.8	100.0	45.5
合計	100.0	100.0	100.0

表 131：属性別（ここ２週間）毎日の生活に充実感がない

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	635	0	5
いいえ	3220	6	6
合計	3855	6	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	16.5	0.0	45.5
いいえ	83.5	100.0	54.6
合計	100.0	100.0	100.0

表 132：属性別（ここ２週間）これまで楽しんでやれたことが楽しめなくなった。

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	510	1	3
いいえ	3362	6	8
合計	3872	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	13.2	14.3	27.3
いいえ	86.8	85.7	72.7
合計	100.0	100.0	100.0

表 133：属性別（ここ２週間）以前は楽にできていたことが今ではおっくうに感じられる。

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	1042	1	4
いいえ	2829	5	7
合計	3871	6	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	26.9	16.7	36.4
いいえ	73.1	83.3	63.6
合計	100.0	100.0	100.0

表 134：属性別（ここ２週間）自分が役に立つ人間だとは思えない。

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	851	0	5
いいえ	2993	6	6
合計	3844	6	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	22.1	0.0	45.5
いいえ	77.9	100.0	54.6
合計	100.0	100.0	100.0

表 135：属性別（ここ２週間）わけもなく疲れたような感じがする。

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	1099	2	4
いいえ	2779	4	7
合計	3878	6	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
はい	28.3	33.3	36.4
いいえ	71.7	66.7	63.6
合計	100.0	100.0	100.0

表 136：属性別主観的幸福感点数（7 点は全体のほぼ中央値である）

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
７点未満	1239	6	5
７点以上	2588	5	6
合計	3827	11	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
７点未満	32.4	54.5	45.5
７点以上	67.6	45.5	54.5
合計	100.0	100.0	100.0

表 137：属性別介護が必要となった場合に施設入所、在宅介護のどちらを希望するか

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
施設入所を希望する	1874	6	6
在宅介護を希望する	1784	1	5
合計	3658	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
施設入所を希望する	51.2	85.7	54.6
在宅介護を希望する	48.8	14.3	45.5
合計	100.0	100.0	100.0

表 138：属性別在宅で介護を受ける場合に介護をしてくれる家族：夫または妻

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	1851	5	7
はい	2141	2	4
合計	3992	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	46.4	71.4	63.6
はい	53.6	28.6	36.4
合計	100.0	100.0	100.0

表 139：属性別在宅で介護を受ける場合に介護をしてくれる家族：子ども

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	2566	3	5
はい	1426	4	6
合計	3992	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	64.3	42.9	45.5
はい	35.7	57.1	54.6
合計	100.0	100.0	100.0

表 140：属性別在宅で介護を受ける場合に介護をしてくれる家族：子どもの配偶者

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	3579	6	10
はい	413	1	1
合計	3992	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	89.7	85.7	90.9
はい	10.4	14.3	9.1
合計	100.0	100.0	100.0

表 141：属性別在宅で介護を受ける場合に介護をしてくれる家族：孫

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	3825	6	11
はい	167	1	0
合計	3992	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	95.8	85.7	100.0
はい	4.2	14.3	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

表 142：属性別在宅で介護を受ける場合に介護をしてくれる家族：兄弟・姉妹

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	3900	7	11
はい	92	0	0
合計	3992	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	97.7	100.0	100.0
はい	2.3	0.0	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

表 143：属性別在宅で介護を受ける場合に介護をしてくれる家族：その他

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	3949	7	11
はい	43	0	0
合計	3992	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	98.9	100.0	100.0
はい	1.1	0.0	0.0
合計	100.0	100.0	100.0

表 144：属性別在宅で介護を受ける場合に介護をしてくれる家族：
介護してくれる人はいない

実数	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	3413	6	10
はい	579	1	1
合計	3992	7	11
比率（%）	調査対象者	ボランティア	参加経験者
いいえ	85.5	85.7	90.9
はい	14.5	14.3	9.1
合計	100.0	100.0	100.0

厚生労働科学研究費補助金（長寿科学総合研究事業）
分担研究報告書

愛知県豊橋市における独居高齢者への見守り活動のプロセス評価
～見守り活動は支援すべき人々をカバーできているのか～

研究分担者　斉藤　雅茂（日本福祉大学社会福祉学部　准教授）
研究協力者　宮國　康弘（千葉大学予防医学センター　研究員）
斎藤　民　（国立長寿医療研究センター社会福祉地域包括ケア研究室長）

研究要旨

本研究では，愛知県豊橋市社会福祉協議会で取り組まれている独居高齢者への見守り活動に着目し，そのプロセス評価として，見守られている独居高齢者と見守られていない独居高齢者に相違があるのか，本来支援すべき人々をカバーできているのかを分析した．当該社会福祉協議会が保有する2014年1月現在での見守りサービスを利用している独居高齢者の基本情報（4,512名）と，JAGESプロジェクトによる在宅高齢者への質問紙調査データ（3,773名）を結合したところ，116名の見守られている独居者と312名の見守られていない独居者の情報が得られた．分析の結果，女性よりも男性独居者の方が1.68倍（95%CI: 1.04-2.71），離別経験がある人ないし未婚の人の方が2.12倍（95%CI: 1.22-3.66），持ち家の人よりも民間賃貸住宅に住む独居者の方が3.40倍（95%CI: 1.40-8.25），見守りサービスを利用しにくい可能性があることが示唆された．また，年齢を調整したうえでも，男性でのみ，教育年数が短い人（OR=3.77），居住年数が短い人（OR=4.09），友人等との交流が少ない人（OR=2.52），ソーシャルサポートが乏しい人（OR=3.57）ほど見守りサービスを利用していないという結果が得られた．集団寄与危険割合を算出したところ，市内において，低学歴な独居高齢者で270人程度，友人等との交流が少ない独居高齢者で230人程度，ソーシャルサポートが乏しい独居高齢者で150人程度がサービス利用から遠ざかっている可能性があり，これらの属性の人々における充足割合は6～7割程度であることが示唆された．現在のサービス利用の仕組みでは，社会的孤立のリスクが高く，健康リスクも高いと考えられる本来，見守るべき人々がサービスから漏れている可能性があり，サービスへのアクセスの方法を再考する必要性があることが示唆された．

A. 研究目的

プログラムの評価には，ニーズの評価，理論仮説の評価，プロセスの評価，インパクト（効果）の評価，効率の評価の順番に積み上げられる（Rossi et al. 2003）．Evidence based practices が謳われるようになって以降，社会福祉の実践現場でも効果や効率性の評価への関心が高まっている．社会的孤立や孤独感の軽減に効果的な介入プログラムについて，いくつかシステマティックレビューが発表され，個別の訪問活動ではなく，集団を対象にした社会活動と教育活動がソーシャル・サポートの増加や抑うつ傾向の軽減に対して効果的である（van Haastregt et al. 2000 ; Cattan et al. 2005 ; Dickens et al. 2011）ということが報告されている．

他方で，効果を評価するためには，当該プログラムが当初狙っていた人々を的確に対象にできていることが前提となる．たとえば，前述した研究では戸別訪問に効果がないと報告されているが，本来訪問すべき人々に訪問できていないとすれば，当該事業に効果がないとはいえない．すなわち，プログラムの効果への関心が高まっているが，その前提となる当初狙っていた人々が的確に利用しているのかというプロセス評価は極めて重要な検討課題といえる．

先行研究によれば，特定健康診査の受診者と非受診者には相違があり，本来受診すべき健康度自己評価が良好でない人や老研式活動能力指標が低い人，抑うつ得点が高い傾向にある人，社会経済的地位が低い人ほど受診しにくい傾向あることが示されている（鈴木ら 2003；三觜ら 2003；松田ら 2007）．同様に，サロン活動に関しては，女性において低所得者の参加割合が高いことが報告されている（平井ら 2010）一方で，もともと孤立していない人が参加しやすく，孤立しがちな高齢者はより取り残されやすいという指摘もある（岩田ら 2004）．

この点で，独居高齢者への見守り活動に関しては，サロン活動と同様に，全国的に普及しつつあるプログラムだが，これまでのところ，実践事例の紹介や事例検討，記述的な分析に留まっているものが多い（佐藤 2011；下開 2011；舛田ら 2011；神崎 2013；澤登 2014）．一部，データベースを社会福祉協議会に導入した研究事例もある（斉藤ら 2010 a）が，見守り活動というプログラムのプロセス評価の蓄積は極めて乏しい状況にある．

本研究では，愛知県豊橋市社会福祉協議会で取り組まれている独居高齢者への見守り活動に着目し，見守られている独居高齢者と見守られていない独居高齢者に相違があるのか，本来支援すべき人々をカバーできているのかを検討した．

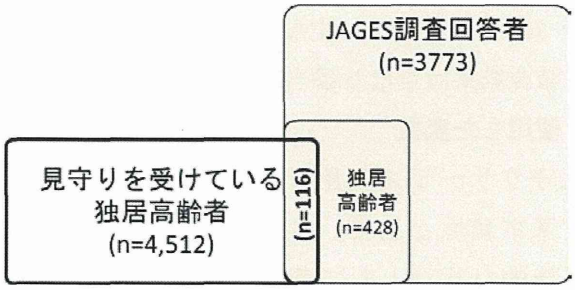
B. 研究方法

1．データの概要

JAGES（Japan Gerontological Evaluation Study）プロジェクトの一環として，2013年10～11月にかけて自記式の郵送調査（横断調査）を実施した．要介護認定を受けていない高齢者5,181名を対象にし，3,957名（76.4%）の回答を得た．ここでは性別・年齢等の基本属性に矛盾のない3,773名のデータを使用した．加えて，豊橋市社会福祉協議会が保有する2014年1月現在での見守りサービスを利用している独居高齢者（4,512名）の基本情報を収集した．両データを結合したところ，

図表 1．JAGES 調査の抽出率と社協データとの突合

独居高齢者数（豊橋市）	15,961
JAGES 回答者	428
抽出率	2.7%
見守られている独居者（豊橋市）	4,512
JAGES データとの突合見込 95%CI	110～133
突合数	116



図表２．分析に使用した変数

		全体	男性 (n=141)	女性 (n=287)
性　別	男　性	32.9	-	-
	女　性	67.1	-	-
年　齢	75 歳未満	50.2	55.3	47.7
	75 歳以上	49.8	44.7	52.3
教育年数	10 年以上	54.4	50.4	56.4
	10 年未満	41.8	46.1	39.7
	不明	3.7	3.5	3.8
婚姻状態	死　別	64.3	53.2	69.7
	離別・未婚	25.0	31.2	22.0
	その他・不明	10.7	15.6	8.4
等価所得	200 万円以上	28.2	40.4	22.3
	200 万円未満	51.6	45.4	54.7
	不　明	20.1	14.2	23.0
居住年数	30 年以上	33.4	36.1	32.0
	10～30 年未満	36.4	34.8	37.3
	10 年未満	25.0	24.1	25.4
	不　明	5.1	5.0	5.2
住宅種類	持ち家	65.7	63.8	66.6
	民間賃貸住宅	12.4	14.9	11.1
	公営・公社・公団	10.3	9.2	10.8
	その他・不明	11.7	12.1	11.5
友人等との交流頻度	週１回以上	54.4	41.8	60.6
	週１回未満	39.5	51.1	33.8
	不　明	6.1	7.1	5.6
手段的サポート	あ　り	76.6	64.5	82.6
	な　し	20.3	32.6	14.3
	不　明	3.0	2.8	3.1
情緒的サポート	あ　り	86.9	73.3	93.4
	な　し	10.7	24.1	4.2
	不　明	2.3	2.1	2.4
健康度自己評価	よ　い	75.9	66.0	80.8
	よくない	19.9	29.8	15.0
	不　明	4.1	4.3	4.2
抑うつ傾向	な　し	45.8	37.6	49.8
	あ　り	30.8	47.5	22.6
	不　明	23.4	14.9	27.5

116 名の見守られている独居者と 312 名の見守られていない独居者の情報が得られた．分析対象者の平均年齢は 75.0 歳（SD=6.3），女性が 67.1%であった．

なお，郵送調査の抽出率から，見守りを受けている独居高齢者の突合見込数を算出したところ，110～133 人となった．すなわち，上記の 116 名という結合結果はかなり妥当なものといえる．

２．使用した変数

見守りサービス利用者と非利用者の特性を表す基本属性として，性別と年齢のほか，社会経済的な状況として教育年数，婚姻状態，等価世帯所得，居住環境を表す指標として居住年数，住宅種類，社会関係を表す指標として友人等との交流頻度，手段的・情緒的サポート，精神的な健康度として健康度自己評価と抑うつ傾向を用いた（図表２）．

所得については，世帯全体の合計所得額（税込み）を「50 万円未満」から「1000 万円以上」の 14 カテゴリーで把握し，各カテゴリーの中央値を世帯人員の平方根で除して等価世帯所得を算出した．ここでは中央値の半分未満，中央値の半分から中央値まで，中央値から中央値の倍まで，中央値の倍以上に分類したものを投入した．

社会関係を表す変数として，友人等との交流

頻度については「友人・知人と会う頻度はどれくらいですか」という設問に「週４回以上」「週２～３日」「週１回」「月１～３回」「年に数回」「会っていない」の6件法で把握され，週１回以上と週１回未満で区分した．また，手段的サポートと情緒的サポートについては，その受領を想定して「あなたが病気で数日間寝込んだときに看病や世話をしてくれる人」の有無と「あなたの心配事や愚痴を聞いてくれる人」の有無を用いた．

健康度自己評価については「現在のあなたの健康状態はいかがですか」という設問に「とてもよい」「まあよい」「あまりよくない」「よくない」の４件法で把握され，よい／よくないに区分した．抑うつ傾向については，15 項目版の高齢者用うつ尺度：Geriatric Depression Scale（Yesavage et al. 1983；Sheikh et al. 1986）を使用し，5 点以上を抑うつ傾向ありとした．

３．分析方法

見守りサービス利用・非利用と上記変数との関連をクロス集計（$\chi 2$ 検定）により検討した．そのうえで，見守りサービス利用・非利用を従属変数にしたロジスティック回帰分析を実施した．さいごに，有意な関連が認められた変数については，相対リスクと出現割合に基づいて集団寄与危険割合を算出し，当該属性に該当する人々が，該当しない人々と同程度にサービス・ニーズがあるとした場合に，市内で何人くらいの未充足ニーズがあるのかを推計した．分析には STATA 12.1 を使用した．

４．倫理的配慮

質問紙調査については，研究代表者の所属機関における研究倫理審査委員会の承認を得て行われた．また，市町村社会福祉協議会からのデータ提供に際しては，個人情報保護のために住所，氏名を削除し，分析者が個人を特定できないよう配慮した．

C．研究結果

１．見守られていない独居者の特性（クロス集計）

図表３は，クロス集計により見守りサービス利用者と非利用者の基本属性の相違を示したものである．これによると，独居高齢者のなかでも，女性は 30.3%が見守りサービスを利用しているのに対し，男性では 20.6%と見守られている人がやや少なくなっていた（p=.033）．また，75 歳以上の人々では 40.8%が見守られているのに対し，75 歳未満の人々では 13.5%と顕著に少なくなっていた（p=.000）．

加えて，持ち家や公営住宅等に居住している独居高齢者の３割程度が見守られているのに対し，マンションやアパートなどの民間賃貸住宅に居住する独居高齢者では見守りサービス利用者は 11.3%と少なかった（p=.013）．居住年数においても，当該地域に 30 年以上居住している独居高齢者では 30.8%が見守りサービスを利用していたが，10～30 年未満の人々では 24.4%，10 年未満の人々では 14.0%と居住年数が短い高齢者ほど見守りサービスを利用していない傾向にあることが示された（p=.029）．

他方で，健康度自己評価とおよび抑うつ傾向については，見守りサービス利用者と非利用者との間で統計学的に有意な関連は認められなかった（それぞれ p=.997，p=.335）．すなわち，より虚弱な高齢者が見守りサービスから遠ざかっているとは必ずしも言えないことを示唆する結果であった．

また，男女を分けたところ，女性の独居高齢者の間では，見守りがある人とない人に基本属性の相違は認められなかった．一方で，男性では，いくつかの変数において統計学的に有意な差が認められた．具体的には，男性のみ，教育年数が短い人（p=.007），離別経

図表３．見守られている独居者と見守られていない独居者の相違（クロス集計）

		全体			男性			女性		
		見守なし	見守あり	p a)	見守なし	見守あり	p a)	見守なし	見守あり	p a)
性別	男性(141)	79.4	20.6		-	-		-	-	
	女性(287)	69.7	30.3	.033	-	-		-	-	
年齢	75歳未満(215)	86.5	13.5		91.0	9.0		83.9	16.1	
	75歳以上(213)	59.2	40.8	.000	65.1	34.9	.000	56.7	43.3	.000
教育年数	10年以上(233)	72.1	27.9		70.4	29.6		72.8	27.2	
	10年未満(179)	73.7	26.3		89.2	10.8		64.9	35.1	
	不明(16)	75.0	25.0	.771	80.0	20.0	.007	72.7	27.3	.159
婚姻状態	死別(275)	67.3	32.7		70.7	29.3		66.0	34.0	
	離別・未婚(107)	81.3	18.7		90.9	9.1		74.6	25.4	
	その他・不明(46)	87.0	13.0	.007	86.4	13.6	.010	87.5	12.5	.202
等価所得	200万円以上(121)	71.9	28.1		71.9	28.1		71.9	28.1	
	200万円未満(221)	73.8	26.2		84.4	15.6		69.4	30.6	
	不明(86)	72.1	27.9	.771	85.0	15.0	.096	68.2	31.8	.718
居住年数	30年以上(263)	69.2	30.8		67.2	32.8		73.5	26.5	
	10～30年未満(86)	75.6	24.4		73.3	26.7		80.8	19.2	
	10年未満(57)	86.0	14.0		81.3	18.8		92.0	8.0	
	不明(22)	72.7	27.3	.029	60.0	40.0	.136	100.0	0.0	.233
住宅種類	持ち家(281)	69.8	30.2		75.6	24.4		67.0	33.0	
	民間賃貸住宅(53)	88.7	11.3		95.2	4.8		84.4	15.6	
	公営・公社・公団(44)	70.5	29.5		76.9	23.1		67.7	32.3	
	その他・不明(50)	76.0	24.0	.017	82.4	17.6	.134	72.7	27.3	.141
友人等の交流頻度	週1回以上(233)	69.5	30.5		72.9	27.1		68.4	31.6	
	週1回未満(169)	78.7	21.3		86.1	13.9		73.2	26.8	
	不明(26)	65.4	34.6	.040	70.0	30.0	.059	62.5	37.5	.407
手段的サポート	あり(328)	71.0	29.0		72.5	27.5		70.5	29.5	
	なし(87)	81.6	18.4		93.5	6.5		68.3	31.7	
	不明(13)	61.5	38.5	.048	75.0	25.0	.004	55.6	44.4	.779
情緒的サポート	あり(372)	72.3	27.7		77.9	22.1		70.1	29.9	
	なし(46)	73.9	26.1		82.4	17.6		50.0	50.0	
	不明(10)	90.0	10.0	.819	100.0	0.0	.579	85.7	14.3	.139
健康度自己評価	よい(325)	72.9	27.1		78.5	21.5		70.7	29.3	
	よくない(85)	72.9	27.1		81.0	19.0		65.1	34.9	
	不明(18)	72.2	27.8	.997	83.3	16.7	.744	66.7	33.3	.465
抑うつ傾向	なし(196)	71.9	28.1		83.0	17.0		67.8	32.2	
	あり(132)	76.5	23.5		77.6	22.4		75.4	24.6	
	不明(100)	70.0	30.0	.335	76.2	23.8	.462	68.4	31.6	.270
	全体	72.9	27.1	－	79.4	20.6	－	69.7	30.3	－

（　）内は全体でのケース数

a) ケース数の少なさを考慮し，$\chi 2$ 検定は各変数の不明を除外した．

験があるないし未婚の人（p=.010），友人等との交流頻度が週１回未満の人（p=.059），手段的サポートの見込みがない人（p=.004）の間で見守りサービスを利用している人が少ない傾向にあることが示された．

２．見守られていない独居者の特性（ロジスティック回帰分析）

つづいて，見守りサービス未利用者の特性を明らかにするために，見守り利用／未利用を従属変数にした二項ロジスティック回帰分析を行った（図表４）．

図表４．見守りサービス未利用独居者の特性（ロジスティック回帰分析）[a)]

	Model 1		Model 2			
			男　性		女　性	
	OR	(95%CI)	*OR*	(95%CI)	*OR*	(95%CI)
性　別（ref.=女性）			—	—	—	—
男　性	1.68*	(1.04 - 2.71)	—	—	—	—
年　齢（ref.=75 歳以上）			—	—	—	—
75 歳未満	4.43*	(2.75 - 7.14)	—	—	—	—
教育年数（ref.=10 年以上）						
10 年未満	1.02	(0.90 - 1.16)	3.77**	(1.40 - 10.10)	0.87	(0.50 - 1.51)
婚姻状態（ref.=死別）						
離別・未婚	2.12**	(1.22 - 3.66)	2.60	(0.78 - 8.67)	1.12	(0.57 - 2.22)
等価所得（ref.=200 万以上）						
200 万円未満	1.10	(0.67 - 1.81)	1.71	(0.67 - 4.37)	0.80	(0.41 - 1.56)
居住年数（ref.=30 年以上）						
10～30 年未満	1.38	(0.79 - 2.41)	1.54	(0.48 - 4.92)	1.06	(0.53 - 2.11)
10 年未満	2.73*	(1.24 - 6.02)	4.09 †	(0.84 - 19.86)	1.27	(0.47 - 3.45)
住宅種類（ref.=持ち家）						
民間賃貸住宅	3.40**	(1.40 - 8.25)	5.64	(0.69 - 46.14)	2.04	(0.72 - 5.76)
公営・公社・公団	1.03	(0.52 - 2.07)	1.04	(0.24 - 4.45)	0.90	(0.38 - 2.12)
友人等交流頻度（ref.=週１回以上）						
週１回未満	1.62*	(1.02 - 2.57)	2.52 †	(0.99 - 6.42)	1.02	(0.57 - 1.83)
手段的サポート（ref.=あり）						
な　し	1.81*	(1.00 - 3.27)	3.57 †	(0.97 - 13.2)	1.00	(0.48 - 2.12)
情緒的サポート（ref.=あり）						
な　し	1.09	(0.54 - 2.18)	1.02	(0.35 - 2.95)	0.43	(0.13 - 1.47)
健康度自己評価（ref.=よい）						
よくない	1.00	(0.59 - 1.71)	1.02	(0.39 - 2.69)	0.85	(0.41 - 1.74)
抑うつ傾向（ref.=なし）						
あ　り	1.27	(0.76 - 2.11)	0.43	(0.16- 1.20)	1.63	(0.81 - 3.28)

*** $p < .001$　** $p < .01$　* $p < .05$　† $p < .10$　OR: オッズ比　95%CI: 95%信頼区間

Model 1: 調整変数なし　Model 2: 性別で層化して年齢のみ調整

a) 各変数の不明群もダミー変数として投入した.

調整変数を投入しないモデルでは，独居高齢者のなかでも，女性よりも男性のほうが 1.68（95%CI: 1.04-2.71）倍，75 歳以上の人よりも 75 歳未満のほうが 4.43（95%CI: 2.75-7.14）倍，死別経験者よりも離別・未婚者のほうが 2.12（95%CI: 1.22-3.66）倍，居住年数が 30 年以上の人よりも 10 年未満の人のほうが 2.73（95%CI: 1.24-6.02）倍，持ち家居住者よりも民間賃貸住宅居住者のほうが 3.40（95%CI: 1.40-8.25）倍，友人等との交流頻度が週１回以上のひとよりも週１回未満の人のほうが 1.62（95%CI: 1.02-2.57）倍，手段的サポートがある（病気の時に看病や世話をしてくれる人がいる）人よりもいない人のほうが 1.81（95%CI: 1.00-3.27）倍，見守りサービスの未利用者になりやすいという結果が得られた.

つぎに，男女で層化して年齢のみを調整したところ，女性では，全ての変数で統計学的に有意な関連は認められなかった.すなわち，サンプルサイズの影響もあるが，少なくとも女性の間では，社会経済的にハイリスクな人々が見守られにくいわけではないことが示唆された.

他方で，男性では，年齢を調整したうえでも，独居高齢者の間で一定の特性がある人々が見守りサービスを利用していない傾向にあることが示唆された．具体的には，教育年数が10年以上の人よりも10年未満の人のほうが3.77（95%CI: 1.40-10.10）倍，見守りサービスを利用しにくいという結果であった．また，サンプルサイズが小さいこともあって5%水準では有意ではなかったが，居住年数が30年以上の人と比べて，10年未満の人々では4.09（95%CI: 0.84-19.86）倍，友人等との交流頻度が週1回以上の人と比べて，週1回未満の人々では2.52（95%CI: 0.99-6.42）倍，手段的サポートがある人と比べてない人々では3.57（95%CI: 0.97-13.2）倍，見守りサービスを利用しにくい傾向があることを示す結果が得られた．

3．見守りサービス未充足数の推計

以上の結果を踏まえて，男性の独居高齢者者に限定して，基本属性の相違による見守りサービス未充足数を推計した．具体的には，上記の分析において有意な関連が認められた教育年数，婚姻状況，居住年数，住居形態，友人等との交流頻度，手段的サポートについて，ハイリスク者も同程度にサービスニーズがあるという前提をおき，相対リスクを算出して集団寄与危険割合と未充足ニーズ数・当該属性の人々の充足割合を推計した．

その際に，分析対象地域（市）には15,961名の独居高齢者がおり，市内の無作為調査において独居高齢者の32.9%が男性であったため，5,251名が男性の独居高齢者であると仮定した．また，社会福祉協議会から提供されたデータによれば，現在，見守りサービスを利用している独居高齢者は4,512名，そのうち，男性は961名であった．

分析の結果，教育年数が10年未満の男性独居者は市内で2,400名程度おり，教育年数が10年以上の人々と同程度に見守りサービスへのニーズがあるとすれば，270名程度がサービスの未充足状態にあると推計された．また，教育年数10年未満の男性独居者のサービスの充足割合は6割程度であるという

図表5．市内の男性独居高齢者の見守りサービス未充足数の推計 [a, b)]

	JAGES調査該当割合	市内数推計（95%CI）	利用しにくさ（RR）	集団寄与危険割合	未充足数推計（95%CI）(A)	現利用数推計（95%CI）(B)	充足割合推計 B / (A+B)
教育年数10年未満	46.1%	2,421 (1,978-2,872)	1.27	11.1%	268 (219 - 318)	443 (362- 526)	62.3%
離別・未婚者	31.2%	1,639 (1,243-2,077)	1.29	8.3%	136 (103 - 172)	300 (228 - 380)	68.8%
居住年数10年未満	24.1%	1,266 (909-1,682)	1.21	4.8%	61 (44 - 81)	232 (166- 308)	79.2%
民間賃貸住宅居住	14.9%	782 (497-1,148)	1.26	3.7%	29 (19 - 43)	143 (91 - 210)	83.1%
交流頻度週1回未満	51.1%	2,681 (2,232-3,128)	1.18	8.4%	226 (118- 263)	491 (409 - 572)	68.5%
手段的サポートなし	32.6%	1,713 (1,311-2,154)	1.29	8.6%	148 (114 - 186)	314 (240 - 394)	68.0%

a) 市内の独居高齢者が15,961名であり，市内の無作為調査の結果において独居高齢者の32.9%が男性であったため，5,251名が男性の独居高齢者と仮定した．

b) 社会福祉協議会から提供されたデータによれば，市内で見守りサービスを利用している独居高齢者は4,512名，そのうち，男性は961名であった．

結果が得られた．

同様に，交流頻度が週１回未満の男性独居者で230名程度，手段的サポートがない男性独居者で150名程度，離別経験者ないし未婚の男性独居者で140名程度，未充足のニーズがあり得ることを示す結果が得られた．いずれも充足割合は７割弱であり，当該属性に該当する男性独居者の３割強の人々にはサービスが届いていないことを示唆する結果となった．

D. 考　察

Evidence based practices が謳われるようになって以降，社会福祉の実践現場でも効果評価への関心が高まっているが，その前提にあるプロセス評価は必ずしも十分に検討されてきていない．本研究では，要介護状態への一次予防としての効果を期待できうる独居高齢者への見守り活動に着目し，実践データと調査データを結合することにより，見守られている独居高齢者と見守られていない独居高齢者に相違があるのか，本来支援すべき人々をどの程度，カバーできているのかを分析した．

本研究によれば，第１に，独居高齢者のなかでも女性よりも男性のほうが見守りサービスを利用していない傾向があることが示された．また，男性のなかでは，社会経済的地位による利用格差が顕著にあり，社会経済的地位が低い男性や社会的に孤立傾向にある男性の間で，見守りサービスを利用していない人が多いという結果であった．社会経済的地位が低い人々が孤立傾向に陥りやすく（斉藤ら 2010 b；斉藤ら 2010 c；斉藤 2012），また，社会経済的地位が低い人々や孤立傾向にある人々が要介護や死亡へのハイリスク者であること（Saito et al. 2012；斉藤ら 2013；斉藤 2015）は既に多数の研究確認されている．全国的にサロン活動への男性参加は少ないと言われているが，本結果は，サロン活動だけでなく，見守りサービスについても，現在のサービス提供体制では男性が利用しにくく，かつ，本来見守りをすべき人々をカバーできるサービスにはなっていないことを示唆するものといえる．

第２に，男性では社会経済的地位による利用格差が認められたため，男性の独居高齢者内での社会経済的地位の相違による見守りサービスの未充足ニーズと充足割合を推計したところ，いずれも充足割合は７割弱であり，たとえば，低学歴や友人等との交流が少ない男性，ソーシャルサポートが乏しい男性の３～４割程度にはサービスが届いていないことを示す結果が得られた点は実践的にも重要な課題といえる．本地域では，見守りサービスの利用登録に際して，民生委員を通じて全ての独居高齢者に等しく声かけと情報提供を行っていた．しかし，本結果は，現在の仕組みでは，本来，見守るべき人々がサービスから漏れてしまう可能性が高く，未充足ニーズをフォローするためには，これまでの方法とは別にハイリスク者に対する個別対応を行う必要があることを示唆するものといえる．

さいごに，本分析によれば，現在のままでは，見守りサービスに期待した効果が上がらなかったとしても，当該サービスそのものに効果がないというよりも，対象にすべき人を対象にできていないことが原因である可能性を否定できない状況にあるといえる．社会福祉・地域福祉の実践現場において，厳密な実験デザインのように対象者をコントロールすることは不可能である．プログラムの「効果」を評価する以前に，当該プログラムが当初狙っていた人々を的確にフォローできているのかという「プロセス」を継続的に評価する必要があることが改めて確認されたといえる．

本分析の限界と今後の課題

さいごに，本分析の限界と今後の課題としては以下の３点が挙げられる．第１に，本分析に使用したデータのサンプルサイズが大きくなく，検出力が小さくなっていることである．しかし，別途行った調査データと結合することにより，サービス利用者だけでなく，未利用者との特性の相違を検討できたことの意義は小さくない．本分析に使

用した調査データは，当該地域の高齢者全体を対象にしたものだったが，より頑健な知見を得るためには，独居高齢者のみを対象，ないし，独居高齢者をオーバーサンプリングした大規模な調査データを収集する必要があるといえる．

第２に，本結果は，あくまでも愛知県の豊橋市社会福祉協議会において取り組まれた見守り活動の結果であり，全国的にも同様の傾向があるかは定かではない．しかし，一地域において，プログラムのプロセス評価を行い，現在のままでは見守るべき人々をカバーできていない可能性が示された点は実践的には重要な知見といえる．住民等による高齢者への見守り活動は，小地域ネットワーク活動という名称で全国各地で行われており，他地域での検証は今後の課題といえる．

＜引用文献＞

Cattan M, White M, Bond J, et al.（2005）Preventing social isolation and loneliness among older people: a systematic review of health promotion interventions. *Ageing and Sociology*, 25(1): 41-67. (2005).

Dickens AP, Richards SH, Greaves CJ, et al.（2011）Interventions targeting social isolation in older people: a systematic review. *BMC Public Health*. 11:647. doi:10.1186/1471-2458-11-647.

平井寛・近藤克則（2010）住民ボランティア運営型地域サロンによる介護予防事業のプロジェクト評価．季刊社会保障研究，46(3): 249-263

岩田正美・黒岩亮子（2004）高齢者の孤立と介護予防事業．都市問題研究，56(9)：21-32.

神崎由紀（2013）地域で暮らす高齢者の見守りの概念分析．日本看護科学会誌，33(1): 34-41.

舛田ゆづり・田高悦子・臺有桂（2011）住民組織からみた都市部の孤立死予防に向けた見守り活動におけるジレンマと方略に関する記述的研究．日本公衆衛生雑誌，58(12): 1040-1048.

松田亮三（2007）生活習慣・転倒歴．近藤克則編著「検証健康格差社会；介護予防に向けた社会疫学的大規模調査」医学書院．21-27

三觜雄・岸玲子・江口照子ほか（2003）在宅高齢者の検診受診行動と関連する要因；社会的背景の異なる三地域の比較．日本公衆衛生雑誌，50(1): 49-61.

Rossi, PH., Lipsey, M.W., & Freeman, H.E. (2003=2005) Evaluation; a systematic approach. 大島巌・森俊夫・平岡公一ほか監訳「プログラム評価の理論と方法；システマティックな対人サービス・政策評価の実践ガイド」日本評論社

斉藤雅茂・平野隆之・藤田欽也ほか（2010 a）小地域ネットワーク活動支援データ管理ソフトの開発と設計思想；要援護高齢者への見守り活動の評価ツール．日本福祉大学社会福祉論集，123: 85-95.

斉藤雅茂・冷水豊・武居幸子ほか（2010 b）：大都市高齢者の社会的孤立と一人暮らしに至る経緯との関連．老年社会科学，31(4)、470-480.

斉藤雅茂・藤原佳典・小林江里香ほか（2010 c）：首都圏ベッドタウンにおける世帯構成別にみた孤立高齢者の発現率と特徴．日本公衆衛生雑誌，57(9)、785-795.

Saito M, Kondo N & Kondo K et al. (2012) Gender differences on the impacts of social exclusion on mortality among older Japanese: AGES cohort study. Social Science and Medicine. 75(5): 940-945.

斉藤雅茂（2012）高齢者の社会的孤立に関する主要な知見と今後の課題．季刊家計経済研究，94、55-61.

斉藤雅茂・近藤克則・尾島俊之ほか（2013）高齢者の生活に満足した社会的孤立と健康寿命喪失との関連：AGES プロジェクト４年間コホート研究より．老年社会科学，35(3)：331-341.

斉藤雅茂・近藤克則・尾島俊之ほか（2015）：健康指標との関連からみた高齢者の孤立基準の検討；10 年間コホート研究より．日本公衆衛生雑誌．印刷中.

佐藤大介（2011）市町村社協による小地域ネットワーク活動の評価と課題．北海道地域文化研究，3: 19-24.